

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学. 教育思想, NDC8:161.3, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

セッション1

発題：近藤光博

「映画を教材にして比較宗教学
の理論的課題を明らかにする
—ひとつの試みの報告—」



レスポデント：富澤かな

井上 それでは、早速セッション1の発題に移らせていただきます。最初は近藤光博さんです。よろしくお願いします。

近藤 おはようございます。時間も無いようなので早速。日本女子大学の近藤でございます。最初に業務連絡的なことなんですけれども、私はインド研究者でございまして、このシンポジウムの主催者としては私にインドのことを、次の中町先生のアラブと並べてですね、なんといっても世界一の映画生産国でありますからインドのことをというような狙いがあったようなんですけれども、どうしても私は今日の話がしたくて。1週間前に井上先生からインドのことをやるように言われたんですが、期待を裏切るといいですか、今回どうしてもこれをやりたかったのです。すいませんでした。一応理論的なことなので、最初の発表としては悪いことではないだろうと思います。それから隣に座っている富澤かなさんも、英・印交渉史の専門でございまして、井上先生も私がインドを当然やるだろうという前提で富澤さんを選んでくださったんだと思うんですけれども。宗教学のご出身でいらっしゃるので今日のような話もちよちよいのちよいというようなものだと思いますけれども、よろしくお願いします。すいません。

はじめに

今日の私のテーマは、現代の宗教学が直面している《理論的な困難》について、です。それはとても深刻な《困難》でありますから、意識ある宗教学者なら、それを見て見ぬふ

りなど到底できません。¹

大学の授業で私は、この《理論的な困難》について、《その乗り越え》について、そして、そのようにして見えてくる《宗教学の刷新》について、学生さんたちに一生懸命、語って聞かせます。²

しかし、私のこうした問題意識と熱意は、最初、学生さんたちにはなかなか理解してもらえません。よくて抽象的、ふつうで空想的かつ空疎、わるければ妄想的で偏執狂的な、学者バカのこだわりすぎない、というのが、授業開始時、彼女たちがもつ第一印象のようです。

宗教を宗教として論じること、一体なんの問題があるのか。そんなことを考えるくらいなら、オウム真理教やイスラーム過激主義のような集団についてちゃんと研究して、社会の安寧と子供の将来のため、ひとつ立派な政策提言をしてくれよ――

あるいは、宗教の真髄を、現代人にもわかるかたちで取り出すことで、混迷する国家社会と地球社会の道程を照らすともし火を与えてくれよ――

こうした訴えの《中身》はもちろん完全に正当です。私自身、専門とするインド研究を通じて、そうした取り組みをしてきました。³

しかしそのことと、《宗教学を理論的に考えなおす》という課題とは、別問題です。否、もっと強い言い方をすべきです。《宗教学の理論的再検討》は、やれるならやるべきものでも、やったほうがよいものでもありません。それは、いま宗教について考えるために必

¹ この点につき、日本宗教学会第68回学術大会（2009年9月11日～13日、於京都大学）での個人発表の冒頭で、私は次のように述べた。「ポスト宗教概念批判の宗教学は、どのように再建可能か。宗教という言葉の使用へのきびしいチェック（すなわち、その言葉の認識論＝存在論的な根拠の明確化要求、およびその語の使用によって隠蔽されたり促進されたり等閑視されたりするものが何かについての反省）を引き受けたとき、宗教についての主題的な語りはどのような刷新を自らに課すだろうか」。難解な表現になっているのは、第一に、ここでの主張が現代の宗教学者にとって常識的で、説明不要と考えたから、第二に、発表時間の制約ゆえに文章をコンパクトにする必要があったからである。この宗教学会での発表と、本日の発表とは完全に連結している。関心がおありの方は、拙ブログ *Buddhi Prakash* 掲載の記事「宗教概念にまつわる言説空間」（2009年9月15日付）をご参照いただきたい。当日配布した資料の増補改訂版をダウンロードできる。

² 日本女子大学にて私は「宗教学」の担当教官である。ただし、所属は文学部史学科であり、宗教学の組織的な教育課程の一翼を担っているわけではない。宗教学者は全学でも私ひとり、週6コマの私の講義と演習だけが、学生たちが宗教学に触れる機会である。なお、「語って聞かせる」と書いたが、これを、一方的で、高圧的な「大学のセンセー」による流し込み教育と読み取っていただければ、困る。私自身は、ワークショップ形式の授業しかしたことがない。私の理論的な関心と枠組みが授業全体を先導していくのは避けられないが、学生たちの討議と気づきを優先するというのが授業全体をつらぬく方針である。その中ではもちろん、私自身にもたくさんの気づきが生じることになる。

³ 私の研究対象は、マハトマ・ガンディーやヒンドゥー・ナショナリズムである。こうした事例研究から「近現代インドのヒンドゥー教と政治」という問題、より一般的には「宗教と政治」という問題を考察しようというのが、私の試みである。

要不可欠なもの、なのです。

家族の絆の流動化、教育制度の疲弊、環境／エネルギー問題、金融危機、少子高齢化、「勝ち組／負け組」の二分、官僚機構の腐敗、医学技術による生命操作、BRICSの台頭——これらはいずれも、私たちの日常生活に直接かかわる構造的な課題です。そして、私の見方では、それらと《宗教学の理論的再検討》という課題とは完全に通底しているのです。思想をとおして現代世界を読み解くと、そういうことが明々白々に見えてきます。

だからこそ、宗教学は、おのれを底の底まで棚卸ししてしまわねばなりません。そうしなければ、宗教学は、単に不要な学問分野になりさがってしまうでしょう。⁴

大学教員である私は、以上のような大きな問題の在り方を学生さんに伝えたいと願い、授業でいろいろな工夫をしています。映画を教材に用いるのも、そのひとつです。⁵

私が伝えたい問題は完全に現実と対応していますが、きわめて抽象的です。ゆえに、学生さんにはリアリティを感じにくいし、そもそも把握しきれないところがあります。そこで、私が試みているのは、《宗教学が直面する理論的困難》と《宗教学刷新のための理論的課題》を解説しながら、この問題全体のうち、この部分を《知る》にはこの映画、その部分を《知る》にはあの映画、という具合に、紹介をさしはさむことです。

授業一コマは90分ですから、ほとんどの映画は全編上映ができません。一部上映もしていません。解説と議論の時間も足りないぐらいで、時間が惜しいからです。題名を板書し、内容を紹介して、レンタルによる鑑賞を強くすすめるだけです。研究室には、紹介した映画をそろえておき、貸し出しもしています。

どれだけの学生が、私おすめの映画を観ているのか、調査したことはありません。授業の感想文（レスポンス・ペーパー）等でみるかぎり、鑑賞してくれるのは全体の2割弱ほどの学生かな、という印象です。しかし、映像ソフトの入手、鑑賞がこれほど容易な時代です。学生たちは、授業期間が終わったあと、いつかそれらを手にとってくれるかもしれません。

⁴ こうしたことを言うのは、自分の専門分野の死守という利己的な関心からではない。宗教学の喪失は人類にとって大きな痛手になる、との考えによる。というのも、宗教団体の壁、国家の壁、言語の壁などを越えて流れつづける、宗教についての徹底した思考をつむぎあげるのに、宗教学は非常に大きな役割を果たしてきたからである。また、宗教の問題は、解決済みであるどころか、今あらためて重要性を増しているからでもある。宗教学という場合は、少なくともその限りで大きな役割をはたすべきである。

⁵ 論文や本をふんだんに使うことができれば、より簡単なのだが、昨今の日本の大学生は、諸般の事情から、難しい文章に時間をかけて取り組む余裕がない。せめてもの工夫として、私は、宗教学を学ぶ人のための論文リストとして「読んでおきたい宗教論 YONSH」というものを作成し、学生に配布している。しかし、残念ながら、このリストに沿って読書をすすめるようとする学生は、本務校ではほとんど皆無である。なお、この文献リストもまた、ネット上に公開してある。上記拙ブログ上で「YONSH」を検索すると、適当な記事が見つかるだろう。ご関心の向きは、どうぞご参照いただきたい。

以上のような、私なりの授業の工夫を、より具体的に紹介していくというのが、今日のお話になります。⁶

「宗教」という言葉の頼りなさ

《宗教学が直面する理論的困難》とは何か——この説明からはじめたいと思います。ちょっと長くなりますが、理由あつてのことです。どうぞお付き合いくださいませ。

最初に、皆さんに了解していただかなくてはならないのは、私が執拗にこだわっているのが、宗派とか教会とか儀式とか、信者とか信仰心とか聖典とかの《現象》ではなく、日本語の「宗教」（シューキョー）という《言葉》のほうだ、という点です。《現象》ではなく《言葉》——誤解を避けるため、この点をどうぞご記憶いただきたいと思います。⁷

ここ数十年間ゆるやかに続いている傾向なのですが、「宗教」という言葉を用いての発言や思考が、行きづまったり、上滑りしたり、空虚に感じられたりする、そのような機会が多くなってきました。「宗教」という言葉がぼんやりと示す事柄には《はっきりとはしないが、良かれ悪しかれ、何か重大なもの》がありそうなのに、その言葉によってかえって物事が見えにくくなっている、そう感じる人たちが増えてきました。⁸

⁶ 導入部の最後に、一点言い添えておく。ここまで「宗教学」という表現を使ってきたが、発表題目ではこれを「比較宗教」と呼んでいる。宗教学と比較宗教との関係性こそは、上記の《理論的再検討》のひとつの焦点である。本来なら、この点にもよく言及すべきところだが、時間の制限から断念した。ご関心をお持ちの方は、質疑応答等の場で、真意をただしていただければありがたい。

⁷ この場合重要なのは、「宗教」（シューキョー）という語が、本日のフォーラムの共通語である英語の religion へと単純には置き換えできないという点である。本論は、日本語の言語空間を考察の対象にしている。

⁸ この点につき、補足説明を加えておく。「宗教」（シューキョー）という語は日常語である。つまり、日本語話者は日常生活のなかで、宗教という語の意味や価値をいちいち検討せずとも、コミュニケーションを行なうことが可能である。当然のことながら、こういった慣習的な言葉の世界では、宗教の《理論》、宗教概念への批判的検討がなされることはない。

一方、「宗教専門家」と呼ぶべき人たちが、小数ながら存在する。職業的宗教学者である私もそのひとりだし、各宗教団体のなかにも、多数派ではなからうが、「専門家」と呼びうる人たちがいる。「宗教専門家」は、宗教という言葉の意味や価値を四方八方から考えつくそうとするため、彼らの間では、重層的かつ個性的な宗教論が多く並び立つことになる。こうして、「宗教専門家」はしばしば宗教理論に強い関心を抱くことになる。

日常語世界と専門用語世界のあいだにはこうして、「宗教」という語を用いた思考と発話にギャップが生じている。つまり、日本語空間には、宗教概念とそれにまつわる言説空間は均質ではなく、断絶を伴う不空数の場が存在しているのだ。

ただしこうした断絶は、宗教という語をめぐる日本語空間を崩壊させてはこなかった。一定のコミュニケーションが、上のギャップを飛び越えて実際に成り立ってきた。これが意味するのは、宗教という言葉の周囲では複数の場が複雑に組みあがって、かなり安定的な全体を構築してきたこと、さらには、その内部の複雑な交渉過程から、豊かな宗教言説が生み出されてきたことである。

しかし、この組みあがりやが今、不安定化している。その揺らぎを示すのが、「宗教」という語を用いた発話と思考の流れがスムーズさを失いはじめているという現象である。

3つの例をあげましょう。

① 日本では今、「スピリチュアル」というカタカナ語が広く流通しています。ブームとしてはやや下火になったようですが（『オーラの泉』もいよいよ最終回をむかえるようです）、むしろそれは社会に定着した部分すらあります。この業界の人たちは、個人の霊的な開けや人類の霊的な進化、あるいは超自然的なパワー（鳩山幸氏は「太陽を食べて」あらゆる病気を治すのだそうです）や超越的な至高存在などを真剣に追求しているのですが、自らを「宗教」とは呼びません。自分たちは、宗教の“後”であり、宗教を超えている、と真剣におっしゃいます。「宗教」と呼ばれるものを全否定する人すらいます。

② 日本の日常生活は、どれほど《不思議なもの》《非合理的なもの》《非科学的なもの》であふれかえっていることでしょうか。それがとくに顕著なのが、テレビ番組、小説、童話、マンガ、ゲーム、映画、ポップ・ミュージックなどのメディアです。そこでは妖怪と UFO が飛びかい、魔法や超能力が駆使され、死者はいつまでも死にません。時間も空間もクネクネねじ曲がった世界、夢か神話のような世界が、子供だけではなく、大人の感性と世界観をも年がら年中刺激しつづけています。ここまできると、単なる娯楽作品とか、余興とか、「オンナ・コドモの遊び」（もちろん男性的偏見そのものの表現です）とか言うてすませられる規模ではありません。この広大な領域を、ちゃんと位置づけてやらねばなりません。あらためて問うてみましょう。これは、大衆的な「宗教現象」なのでしょうか。多くの方がその呼び方には無理がある、とお感じになるでしょう。実際、それが「宗教」という言葉で描写されることは、ほとんど全くありません。

③ 宗教と政治の関係にもはっきりと変化が生じてきました。宗教は個々人のこころの問題、あるいは好きな者たち同士の集まりの問題であって、人さまにすすめたり、人前であられもなく披露したりすべきものではない。ましてや、政治家がこれに首をつっこむなんて論外である——かつて、こうしたことが簡単に言えてしまう時代がありました。しかし今や、なかなかそうはいかなくなってきました。日本の歴史や文化、倫理道徳などをまじめに考えようとするとき、天皇制や靖国神社、仏教や儒教、武士道などをはずせない、そのような声がとても強くなってきました。⁹

《かねてより「宗教」と呼ばれてきたもの》、《「宗教」と呼んでかまわないもの》、《「宗教」とは呼べないにせよ「宗教」との共通性を多く持つもの》などが、相変わらず

⁹ 海外に目をやれば、こうしたことはさらに明瞭に了解されるだろう。たとえば、イスラームの世界では、宗教と政治を分けた上で、それぞれを私的領域と公的領域に振り分けることはきわめて困難、ほとんど不可能なのであって、それ独自の宗教／政治、公／私のカテゴリーをもっていること、さらには、そうした言説＝制度が9.11テロのような事件にかかわっているらしい——そうした見方は、日本では今やずいぶん広く行きわたっている。そして、このような「海外宗教事情」に関する知識や知見は、日本の「宗教」言説に大きな影響をあたえている。

元気だったり、死滅したり、破壊されたり、再活性化したり、生まれ変わったり、あらたに生まれたりしている。問題化したり、期待をかけられたり、嫌悪されたり、熱中されたり、商売として成り立ったり、政治家に吸収されたりしている——これが、日本と世界の現状です。

なのに、肝心の「宗教」という言葉がどうも頼りない。この言葉を使って何がわかるのか、わからないのか、それさえボンヤリしている。こうした状況は、宗教学にとって死活問題です。もちろん、事は宗教学者に限りません。宗教に関心をもち、宗教について落ち着いて考えてみたことのある人なら誰でも、戸惑いを覚えておられるはずです。

言い換えれば、《「宗教」という言葉のまわりに組みあがっていた、いろいろな言葉と考え方の全体》が不安定化しているのです。具体的な現実のほうが変化をはじめたため、「宗教」という言葉の意味と価値が大きくゆらぎ、従来の《組みあがり》に収まらなくなっているのです。日常語はゆっくりと変化しますが、「宗教専門家」（宗教学者と一部教団関係者など）は毎日毎日それに直面せざるをえません。

こうして《宗教という言葉にまつわる理論的課題》が浮かび上がってきました。この問題に対して、現代の宗教学者は長いこと苦しんできましたが、最近ひとつの道を見いだしました。それは、《近代性》について一から考えなおす、というごく基本的な道です。

「宗教」と「世俗」の二分法

古代史をやっつていようと中世史をやっつていようと、現代の宗教学者は皆、《近代論》を避けて通れません。なぜでしょうか。答えは簡単で、「宗教」という言葉が、まったく《近代的》な言葉だからです。精確には、昔からあるにはあった「宗教」という言葉が、近代という時代のなかで（日本ではふつう、明治以降の時代を「近代」と呼びます）、全く新しい意味と内容をもつようになった、ということです。説明します。

人類は太古の昔からいろいろな「宗教」をもっていた、あるいは、人間は本質的に「宗教的」であって、それが歴史のなかでいろいろと展開して、現在の「宗教」になっている——これは、今でも十分支配的な、普通一般の考え方のわけですが、宗教学者は今、この人類史理解に真っ向から疑問符をたたきつけています。

ただし、そこで宗教学者はなにも、「宗教」と呼ばれてきた歴史上の諸《現象》や、「宗教的」と呼びうる人間の性質の存在を全否定するわけではありません。問題は呼び名なのです。「宗教」とか「宗教的」というこれらの呼び名は、どうも一面的すぎはしないか、という疑問を呈しているのです。

一面的とはどういうことか、端的に申し上げますと、「あまりに近代的」ということです。ここでの「近代」とはもちろん、モダンでかつこよく、進歩的で未来志向的、といった意

味ではありません。「西洋近代的」な固定観念や常識に染まりきっている、という意味です。「宗教」という言葉は、《西洋近代文明》のものの見方や価値観に染まりきっていて、それが原因で、前のパートで述べたような《困難》が生じるようになった——宗教学が最近明らかにしたように、これはほぼ間違いないこととして言えそうです。

では、そのような《西洋近代的》バイアスをちゃんと意識して、注意深くなりさえすれば、私たちは「宗教」という言葉を今後も上手に使いつづけられるのでしょうか。そうではなからう、というのが、これまた宗教学者のほぼ一致した見解です。

時間もありませんから、ここからは私なりの仮説を大幅にとりいれて、大胆に述べてみましょう。「宗教」という言葉／呼称／概念は、使い方でどうにかなるというようなものではありません。なぜかといえば、それが最初から《宗教でないもの》と対になっているからです。

ちょっと用語解説をします。この《宗教でないもの》の呼び名として、「世俗」を採用することで、最近の宗教学はほぼ意思統一されています。やや風変わりな言葉なのは、それが英語の secular の直訳語であるからです。「俗な」とか「低俗な」とか「俗世間の」とかいう意味ではありません。《西洋近代文明》を作り上げた、根本的な原理＝制度＝基盤＝感性の全体を《世俗》(secular)と呼んでいるのです。

もっと精確に言いなおしましょう——「宗教」という言葉から考えはじめるので、もやもやしてしまうのです。《宗教でないもの》＝《^{セキユラー}世俗》からはじめて、そこから「宗教」を見つめてみましょう。すると見えてくるのは、次のような状態、すなわち、私たちの現代日本社会（および、そこから見られるものとしての「世界」）において、しっかりと出来あがっているのは《宗教でないもの》＝《^{セキユラー}世俗》の方であって、「宗教」と呼ばれているのは、実は、そこからはじき出されたもの／とり残されたもの／不要で低価値とみなされたものである、という事態です。専門的には「残余概念」といいますが、残り物をいれるための、いわば“ゴミ箱”のようなものとして、「宗教」という言葉（念のため言い添えますが、《現象》ではありません、《言葉》です）は作られ使われてきた——こう考えてみることで、全体がよく見渡せるでしょう。

したがって、「宗教」という言葉はいくら注意深く使ってみたところで、《^{セキユラー}世俗》をいつも呼びこんでしまいます。ただ「シューキョー」と言ってみたところで、意味は成り立ちません。単なる音です。それに意味内容や価値を与えているのは、《宗教／^{セキユラー}世俗の二分法》の網の目です。これをくぐらない限り、「宗教」という言葉はコミュニケーションされえません。

こうして、古代から現代にいたる、地球上でおこった無数の《現象》を、「宗教」という《言葉》で呼ぶことの問題が明らかになってきます。問題は、「宗教」という一単語の

妥当性ではないのです。それだけだったら、遠藤周作が「神」を「玉ねぎ」と呼び変えたように、何とでもなります。むしろ問題は、《宗教／世俗の二分法》が、各々の地域の各時代でどのように受容され、翻案されてきたか、ということなのです。

ここで本質的に重要なのは、この二分法が、《西洋近代文明》の根本を形づくるものであるという点です。「根本」とはすなわち、価値観＝世界観そのもの、ということです。法律や職業、知識や人生設計、経済や恋愛、出産や育児や葬儀、人生の全ての面にかかわります。この全体の《組みあがり》をどう理解していくか、そして、それがうまくいかなくなっているのなら、どう刷新していくか——《宗教学が直面する理論的課題》とは、まさにこうした文明論的な問いに直結しています。

これでやっと背景説明は終わりです。《言葉》の整理と説明が終わったので、いよいよ、お待ちかねの映画の話に入ることができます。

以上述べてきたのは、問題の大きな見取り図です。学生さんには、その要素要素をできるだけ具体的にイメージし把握していただかないといけません。そのために導入するのが、映画というわけです。

神話的なもの／宗教的なもの

現代の日本語で「宗教」という言葉がもっとも強くイメージさせるのは、教団（宗教団体、宗派）です。学生さんたちの中でこのイメージ＝意味があまりに強いと、私が上で解説をしてきた《問題の大きな見取り図》はさっぱり了解されません。

そこで私は、教団型の宗教性ではないけれど、たしかに《宗教的》と呼んでもよいと思われる、人間のあり方、世界のあり方、ここでは《神話的なもの／宗教的なもの》と呼びますが、そういったあり方に気づいてもらおうとします。¹⁰

この流れで紹介すべき作品はきわめて多いのですが、私は次の3本をあげることにしています。

『楢山節考』（今村昌平、1983年）

『クジラの島の少女』（ニキ・カーロ、2002年）

『バロン』（テリー・ギリアム、1988年）

いずれもが、《神話的なもの／宗教的なもの》を見事に描き出している作品です。もち

¹⁰ 《神話的なもの／宗教的なもの》は、言うなれば、“かなり皮膚感覚的”なものである。体験を通して感知したり体得したりするものであるから、その説明のために言葉を尽くすだけでは、教授という目的をはたせない。演劇や芸術、ときに恋愛や喧嘩のような身体をともなった経験が肝要であり、授業内ではそれへの注視をうながす。同時に、アクセスが最も容易で、なおかつ私自身が最もよく精通している、映画というメディアを強く推薦する。言うまでもなく、映像と音響と物語から成る映画も、身体的な経験を与えるメディアである。

ろんそれらは映画という近代の表現媒体ですから、《神話的なもの／宗教的なもの》のナマの表現ではありえません。メディアとしても内容としても、それらはどこまでも《近代的》なものです。しかし、前近代（プレモダン）でも後近代（ポストモダン）でもある《神話的なもの／宗教的なもの》がそこに見事に描き出されているのは、たしかです。

『楢山節考』は、大変評価の高い作品です。カンヌでパルムドールを受賞しており、ご存知の方も多いでしょう。「自然への畏怖や人間との共生、そして受け入れざるを得ない人間の業や運命」（的田也寸志）といった、人間賛歌の映画ととらえられることが多いようです。それはもちろんその通りなのですが、私としては、《神話的なもの／宗教的なもの》の世界を真正面から描いた作品として注目しています。亡くなった義母は蝶として嫁の前に現れます。それは両手を広げた大きさがあります。そのことを語り聞くシーンには、何の説明もありません。季節とともに移り変わる、ありきたりの一場面にすぎません。息子に殺された父親は、裏山にあらわれます。登場人物は一瞬、そんなバカな、と思うのですが、それだけです。殺害され遺体を埋められた場所にたたずむ父は、殺した息子であり、また殺された父でもあります。異様な風が吹いています。そして何より、あの姥捨て山。それは実在する物理的な場所です。何一つ超自然的なことはありません。しかしやはり異界なのです。見たことのない場所なのです。その証拠に、息子に背負われて山に向かう途中、老母は物理的にしばらく消え、また現れます。こうした異界と霊威は、村の日常とは別であり、かつまた一つです。農作業、性欲、妊娠出産、食糧難、村の人間関係、季節の移り変わり、動物と植物、これらのものと連続しながら、なお異彩を放って、そこで息づいています。

『クジラの島の少女』は、「エコロジカル」で「スピリチュアル」と形容することのできる映画です。南国の島、クジラという装置が、まさにそれを表します。主人公が、男性優位のマオリの伝統に立ち向かう少女であることから、ジェンダーの観点からこれを観ることも正当でしょう。「子どもの純真」を見いだす人もいるでしょう。しかし私としては、そういった見方に物足りなさを感じるのです。これは《神話的なもの／宗教的なもの》を描いた作品ではないか、と思うのです。

百年から百数十年前を舞台にしたと思しき『楢山節考』とは異なり、『クジラの島の少女』の舞台は現代です。そのため、《西洋近代文明》の浸透と展開の複雑な過程のなかで、壊されたり失われたりしたものの残滓が、より明確に描き出されます。その残滓は《宗教》そのものではありません。映画の中で「神話」（myth）と呼ばれるものです。しかしこの映画は、《宗教》に深く深く接続する存在の深層、つまり、神話の世界とはこの世に他ならないという人間的事実を、しっかりと描き出しています。老人と子供と動物と秘儀、女性と海とクジラと剣舞、交信と迷いとジェット機と裸足、学校と青空と伝説と病院——そ

ういったものの全てから成るひとつの世界。私たちのありきたりの言葉をありきたりに使っては描写できない世界。であるからこそ、近代人ならまずは戸惑い立ちすくむだろう世界。それが、この映画の主題なのだと僕は思います。

『バロン』は、テリー・ギリアム監督の作品の中では、あまり評判のよいものではありません。しかし、ここでの紹介にまったく値します。『バロン』の企てる近代批判の根源性は、圧巻です。テリー・ギリアムはおそらく、それを完全に意図しているものと思われます。この映画は、神話をそのままに描く作品です。『楯山節考』と『クジラの島の少女』のいずれもがリアリズムにのっとっていた、それゆえ 20 世紀的な映画表現であるのに対し、その形式と文法を『バロン』は捨て去っています。もちろん説明すら加えられません。

《近代的なもの》からすれば単に荒唐無稽なプロットと表現形式だけで、127 分が貫かれています。私は、この実験は成功していると思います。ギリアムの多くの作品の例にもれず、『バロン』もまた商業的には成功しなかったようですが、これは《神話的なもの／宗教的なもの》を現代においてより直裁に表現したエンターテインメントとして、稀有な作品です。

《世俗》の価値観

《宗教／世俗の二分法》において、《世俗》とはなんでしょう（繰り返しますが、ここでの《世俗》は「俗な」「通俗的な」「低俗な」「俗世間の」といった意味ではありません）。「科学」「合理性」「理性」などが思いつきます。そこからは、「科学者」「官僚」「科学技術」「兵器」「理屈っぽさ」「経済」などが連想されるでしょう。要するに、《世俗》とは、「近代的」とみなされるものとほとんど完璧に重なっています。¹¹

しかし、現代の日本で、これらの言葉はかつてのような輝きを失ってしまいました。たとえば、「鉄腕アトム」のような「科学の子」が正義と未来を担うことは、今やめったにありません。環境破壊や公共事業、生命操作や金融工学、神経衰弱やゲーム中毒など、むしろ悪いイメージをともしることが多くなってきました。¹²

そこで私の授業では、《世俗》≡《近代的なもの》の否定的な面をそれほど強調しないようにしています。今の学生さんたちは、そんなことは先刻承知だからです。

¹¹ 本来であれば、《世俗》概念については、現代日本語の言説空間における不在がまず指摘されねばならない。しかし、時間の都合上、それは割愛せざるをえない。ご関心をもたれた方は、拙ブログ「Buddhi Prakash」の記事「宗教概念にまつわる言説空間」（前掲）をご参照いただきたい。

¹² 蛇足ではあろうが、付言するなら、「科学」「合理性」「理性」は今でも、全否定されたわけではない。子供に「非科学的」「非合理的」「非理性的」な人物になってほしいと願う親など、皆無だろう。しかしそれでもやはり、その不都合や限界、行きすぎや行き詰まりが強く意識されるようになったのは間違いない。

むしろ彼女たちにいま伝えなければならないのは、《世俗》≡《近代的なもの》の肯定的な価値です。それは何も、武力や財力だけで世界各地、若い世代に押しつけられてきただけのものではない、そういう面はたしかにあったが、それだけではない——このことをあらためて伝えなくてはなりません。

人権や自由、民族自決や自治、民主主義などの理想が、いかに自分たちにとって根源からして大切であるか、学生さんたちもちゃんと分かっています。説明は要りません。むしろ、知らないか忘れられがちであるのは、《世俗》の価値観はそうした政治思想、社会思想のレベルだけでなく、個人の倫理観や価値観をも前向きなものにしてきた、ということです。自律した個人が、周囲との絆を大切に、周囲に支えられながら、苦難をひとつひとつ乗り越え、一度きりの人生を生ききる——こうした個人的な人生の指針もまた、《世俗》の価値観により与えられたものです。

きっと近代以前から、人はそのようにして生きてきたのでしょう。しかし、《世俗》≡《近代的なもの》で特徴的なのは、そこに《宗教》が露わになっていないことです。基本的な人生観や価値観は、個人で築きあげられるものではありませんから、家族や所属集団を通じて、あるいはメディアを通じて、要するに、個人の外部から与えられるものです。そこには多様な傾向が含まれていますから、文化や伝統といったものから完全に自由な個人などいるはずもありません。そして、文化や伝統は《宗教》と深いつながりがあります。しかし、《世俗》≡《近代的なもの》の価値観においては、《宗教》がさほど強く前に出てこない、あるいはほとんど全くでてこないが、それでもなお、どれだけ豊かな人生が送れるか、私はそのことを学生さんに伝えようとしています。そうすることで、《宗教／世俗の二分法》における《世俗》という《重心》のイメージを強くしてほしいと願うからです。

この目的のためには、一部のアメリカ映画ほど適切なものではありません。宗教右派、キリスト教原理主義など政治的に活発な宗教勢力のことが、日本でもよく語られますから、¹³ アメリカのゆるぎない伝統である人生観、あつけらかんとして、前向きで、人好きで、家族を思いやる、プラグマティックな人生観を、日本人は忘れてしまいそうな勢いです。

そこで私がお勧めするのが、次の3本の映画です。

『フォーエバー・フレンズ』（ゲイリー・マーシャル、1988年）

『トイ・ストーリー』1&2（ジョン・ラセター、1995／1999年）

いずれも、《宗教的》なテーマはおろか、《宗教的》な表象すらほとんど全く出てきません。そこにあるのは、朗らかで前向きな《世俗》の価値観・人生観です。

いざ探してみると、《宗教的なもの》を画面から排除した作品は、驚くほど少ないのが

¹³ これに対応する映画が「クリスチャン・フィルム」である。『人間消失』は、海外でも知られた数少ない作品のひとつである。この影響下にある作品群は、アメリカ国内では大変広く流通している。

わかります。ほとんどの映画が、何かしら《宗教的なもの》を引用したり主題化したりすることで、効果発揮やメッセージ伝達をねらっています。上の3本は、数少ないリストの中でもとくにおすすめのものです。

宗教紛争のアーキテクチャ

時間がないので、宗教紛争に関してはかいつまんでお話しします。宗教紛争については、皆さんの中でイメージが非常に強いと思います。特に日本ではオウム真理教の事件がありますし、9・11というのも決して対岸の火事ではないという感覚があります。しかし、この「宗教紛争」というのは非常に厄介というか、使わないほうがいい概念ではないかとすら考えます。なぜかというと、小さい小競り合いならそうかもしれないけど、大規模紛争で主として宗教的であるような紛争など一つもないからです。そのことを伝えるためにまず『ドゥ・ザ・ライト・シング』、スパイク・リーの映画を一つ出してみます。

『ドゥ・ザ・ライト・シング』（スパイク・リー、1989年）

これは黒人の、ニューヨーク、ブルックリンで起こる人種暴動の映画なんですけれども、そこであるのはいったい何なのか。黒人であるから暴動になったのではなくて、人種主義が彼らを暴徒にする。いったいそこで黒人というのは何なのか。自分たちも黒人というのを自分たちの中へどんどんおりこんでいく。いったいそこであるのは何なのであろうか。この紛争対立は“何”であるのだろうか。そういったところを解ってもらうために、この映画を出します。

『シリアナ』（スティーヴン・ギャガン、2006年）

二本目は『シリアナ』です。これはもう単純に、いかに宗教紛争というものは複雑か。政治から経済からいろんな思惑がむちゃくちゃに、よくこれを2時間に収めたなというぐらいの、複雑さであるか。この映画、僕は大好きですけれども、とにかく難しい。一回見ただけでは解らない。たしかに爆弾を船に乗付けて石油工場に突っ込むというシーンがありますけれども、そのパキスタンからの若い出稼ぎ労働者は、たしかにあるイスラーム過激主義団体の教えにしっかりとハマりこんでいて、彼の心の中は宗教的なものでいっぱいなのでしょう。しかしだからといって、あの『シリアナ』の石油精製工場の爆破を「宗教」と言ってそれでいいんでしょうか。ぜんぜん違うはずなのです。そういったことを解ってもらう、それだけで半年かかる話なんで、とりあえず映画を見せる。しかし『シリアナ』は難しすぎて評判はちょっと良くないです。

『ボンベイ』（マニラトナム、1997年）

『ボンベイ』はインド映画でとりあえず入れていますけれども、僕は、上の日本について述べたような意味ではあんまり深い映画ではないと思います。ただ映像と音楽があまり

に素晴らしい、それだけでも十分価値はありますけれども。

おわりに

私の宗教学の講義において、教材としての映画は、《ある抽象的な問題に、より具体的なイメージを与える》との目的のために使用されています。《映画を一つ以上の宗教文化を含みこんだ作品とみなし解読する》ではなく、《ある包括的な宗教理論に即して複数の映画を配置する》という試みです。本発表はそのささやかな報告でした。

あらためて考えてみますと、《宗教／世俗の二分法》が宗教学のあらたな対象であり領域であるとするならば、全ての映画が宗教学教育、宗教文化教育の教材になりえます。なぜなら、全ての映画は、《宗教》と《世俗》の独自のブレンドであるからです。こうして、私たちにとって映画は、教材としての可能性を無限にひめたメディアであります。

むしろ私たち「宗教専門家」に求められるのは、どの映画を、どんな理論的枠組みのなかで位置づけるのか、ということでしょう。私としては、《西洋近代文明》に端を発する《グローバル近代》の問題を追究し、その刷新への視点を打ちたてる、そんな宗教学の教材として、ますます映画を活用していきたいと考えています。

井上 どうもありがとうございました。具体的にお願いしたのですが、けっこう具体的にしてくれました。映画を時間の関係でお見せできなかったのですが、ここで示されたものをぜひ何らかの機会に見ていただくと、今日の話もまた面白いと思います。それでは富澤さんのほうからコメントをいただきたいと思います。

富澤 ご紹介をいただきました富澤でございます。近藤先生のお話、大変興味深くうかがいました。と、いいますのも、近藤さんはいかに映画を宗教教育に使うかということを極めて意識的にお話しくださったと思ったからです。宗教教育・研究における映像の利用にはさまざまな位相がありうると思います。まず、リアルな宗教情報を含む、つまり、とりあえず信頼しうる「ファクト」を含むテキストとしての使い方があります。あるいは、その映画自体を、なんらかの宗教性や宗教理解を読み取りうる一つの研究資料として対象化してみることももちろん可能です。あるいは、もう一つメタレベルに上がって見て、「宗教」という概念自体を対象化して分析するための素材とすることも可能と思われます。いろいろ位相があると思いますが、私がうかがった印象では、近藤さんは今私が申し上げた分類でいえば、第3の、見方自体を対象化する形で映画を捉えるという視座をはっきり示されたように思います。それが私には興味深かったのです。

私自身宗教をテーマに大学で授業を行っておりますが、どう映像を使うのがよいのか、

難しさを感じています。私の受け持っているのはどれも一般教養の講義で、そこでは宗教のいろいろな基本常識を半年あるいは1年で伝えて欲しいという要求が大きいです。そこでリアルな映像を素材にさまざまなファクトを見せたい（つまり第1の利用法ですが）という気持ちはあるのですが、映画というものは意外と使いにくいものだと感じるのです。映画にはさまざまな形式がありますが、多くはフィクションで、しかも1時間半ほどの強い枠があって、1つの世界として完結しています。そこから、あるファクトだけ取り出すというのが、意外に、とても難しい。すべてがリアルに、あまりにも「本当」に見えてしまう。そこで、ここからここがフィクションでここからここがファクトであると切り分けて見せるとすると、映画をみせる甲斐がそもそもあるのかという疑問も出てきてしまうのです。

私の講義は専門教育ではありませんので、なかなか宗教概念の問題にまで踏み込めないというのが実状です。といって、古今東西の宗教に対する「ファクト」の知識を大量に詰め込もうというのも現実的ではないですし、意味がないように思われます。そこで、私が目指しているのは、学生たちが持っている宗教観を少しでも多様化したい、柔軟になるきっかけを持ってほしいということです。このとき私にとって大きな問題となるのが、多くの生徒が持つ、宗教に対する強い不信感です。彼らの多くは、宗教というものは一種の安易な作り物だと考えています。宗教とは心が弱ったときに、その心を支えてくれるお話のようなものであって現実ではない、そして近代世界を生きる我々にとっては、我々が健やかで元気で強くあれば、普通はいらないものである。そのような前提を根強く持っている場合が多いのです。そういう生徒を見ていると、このような過剰な不信は、宗教に対する過剰な期待と表裏をなしていてどちらにも裏返りうるもので、どちらにしても危ういものではないか、という不安を感じます。

例えば、生徒のなかには奇跡を語る宗教は信じられないという人が多いのですが、それは、何か鮮やかな奇跡を眼にしたら突然信じてしまうという可能性をはらんでいるわけで、非常に面白い宗教観といえると思うのです。彼らの中には、ファクトとフィクションというものがきっちり切り分けられるはずである、そして宗教学者というのはそれをやってくれる人であろうという期待があるように感じます。ですが私は、それは宗教学者の仕事ではないとの考えを彼らに伝えています。私たちの生活はファクトとフィクションで切れるものではないというふうに私は考えていますし、そして、宗教というのはフィクションでもなければファクトでもない、あえて言えば両方である、ファクト&フィクションである、と考えているからです。宗教がそうであり私たちの生全体もまたそうであるというふうに伝えられないかと思っているのです。その意味で、私の意図は、近藤さんがおっしゃった宗教と世俗の二分法の問題につながってくると思います。つまり生徒さんの中にも、宗教と

いう「虚」と世俗という「実」という、ある種の二分法が存在しており、そして私はそれを何とかもう少しゆるやかにしてみたいと考えているのです。さらに、「宗教」なるものには、宗教という言葉と現象という次のレベルの虚と実があるわけですが、近藤さんはそれを分けて語られました。そしてそれを考えるようなレベルを設定した上で映画を使うと非常に興味深いと指摘されたと理解いたしました。やはり映画というのは、非常に強い力で虚実を操る力であると思います。映画は映画館から離れつつありますが、それでも映画には1時間半もしくは2、3時間の尺があって、本来は映画館という暗く閉ざされた空間で見ることを前提とするもので、それが一つの映画の力だと思います。それはそこで一つの世界を完全に作ってくれる、そこでは虚と実というものが渾然一体となって現れる、そしてそこに我々は入って行って感情移入をして、体感することができる。だからこそ映画には魅力があり力があり、恐ろしさもあるのだと思います。ですから、私は何とか映画をファクトを伝える素材として使いたいという気持ちもあるのですが、それよりむしろ、虚実の線引きというものを対象化するための素材として使えないだろうかという期待をいただいているのです。

その意味で非常に面白く思っていて、うまく使えないかと考えている映画が、近藤さんが世俗の価値観を表す映画として挙げられた『トイ・ストーリー』です。虚と実というものが交錯しておりたやすく切り分けられるものではないということが、この映画によってイメージできるのではないかと期待しているのです。この映画はまさに「おもちゃのお話」でありまして、人形ごっこのリアリティそのものです。しかもその中にフィクションのレベルが何層もありまして、人形たちの規格がばらばらなわけです。大きな人形もあれば小さな人形もいる、三頭身の人形もあればポテトの人形もいます。背負っている世界観、物語がばらばらのものが集まって、その違う規格のものが、違うフィクションの重なりが、そこで一つの物語を作る。そして見ている我々は、子供のときにお人形ごっこをして、このお人形とこのお人形はどうしてサイズが合わないんだろうと思いつつそれをうまく乗り越えて遊んだように、その多層的な物語に入っていくことができます。

その、何層にもわたるフィクションというものを、あの映画はうまく操って、しかも実に楽しく作っていて非常に興味深いわけです。主人公の一人のバズ・ライトイヤーは、量産品であるにもかかわらず自分が唯一無二のヒーローだと信じています。その彼がある場面で、他の量産品、まったく自分と同じ顔をしたものとずらっと並んでしまう。でも彼らの固有性はその中でも保たれます。さらにそこに彼の敵役の人形が現れて、「俺はお前の父だ」という。ここではまた別のフィクションのイメージが入り込んでいます。ダースベイダーとルークであり、オイディプス王にもさかのぼれます。こんなふうに、さまざまなフィクションが何層にも重なって作動する様を見せてくれる、それが映画のすごい力だと

思うのです。

実際に私たちの生というものは、ファクトだけでできているわけではなくて、例えば今日は9月20日でもうすぐ11時だということ自体、天体の動きというある種のファクトから始まっているにせよ、それを観測し、ある種の切れ目をつけてカウントし、その上にこれは日曜日（太陽の日ですね）であり、もうすぐお彼岸であるなど、そういうさまざまな物語を何層も重ねたところに初めて成り立っています。ファクトとフィクションのあわいに、私たちがリアルだと思っていることが成り立っている。こういうことを何とか伝えられないだろうかと思っているわけです。

『トイ・ストーリー』について面白い点がもう一つあります。CG映画の独特の質感のせいで、リアリティの感覚がぶれるということです。CGで見ると、人形がリアルで人間が結構気持ち悪く不自然なのです。実写、アニメ、CGなど、それぞれの映像の持ちうる力の差異というものも重要な問題になってくるように思います。そういったことも、討議の時間にみなさんのご意見をうかがえればと思います。また、映像と他メディアの関係も問題もあります。映像と漫画や小説、さらにいえば、研究書、モノグラフと、映画、漫画、アニメなどを比べつつ、研究の対象・素材としていく必要があると思います。そのことも討議できたら興味深いと思います。

さらに、今までフィクション作品に特化して話してきましたが、もう一つの映像形態、ドキュメンタリーもまた実はかなり扱いの難しいものです。私はシリアで製作された『ドールズ』というドキュメンタリーを授業で使ったことがあります。日本ではNHK・BSで、『シリア カゴの鳥では終われない』という（かなり先入観をもたらししてしまう）題で放映されたものです。本作は、シリアの一女性をメインにある家庭の様子を描いています。そしてその女性の小さな娘達も遊んでいる人形、フッラ fulla 人形が、アメリカ産のバービーに対して、イスラーム的な女性の価値観を体現する人形としてクローズアップされます。フッラのコンセプトについてのメーカー側へのインタビューと、そのフッラで遊んでいる子の母親が再就職や自己実現を望みながらなかなか果たせない様とが、交互に映しこまれているドキュメンタリーとなっています。なかなか面白いのですが、もちろん、非常に意図的な作品です。イプセンの『人形の家』などのイメージが前提となっていて、フッラのような私で果たしてよいのでしょうか、という問いかけがはっきり示されています。そしてこれを見た生徒たちは、ほとんど皆、これを完全に確定的な「事実」と捉えていました。ドキュメンタリーの力と怖さです。

私は、その感想はよく解るけれども、これは制作者である女性ディレクターが明確な意図と強い意志を持って撮った結果であり（そのこと自体は大いに尊重されるべきであるにせよ）、これが「事実」であるかどうかは実はわからないと解説しました。ところがこれ

をひるがえってみますと、逆転的なことを自分はしているな、と感じるのです。つまり、ドキュメンタリーに対しては、私は平気で虚実を切り分けてしまっているのです。『トイ・ストーリーズ』のようなフィクション映画については虚実の分けがたさを語っていたはずなのに、ドキュメンタリーが完全に事実として受け入れられたときには私はそれを何とか虚に引き戻そうとしているという、奇妙な逆転現象がおきています。そういう意味でドキュメンタリーとフィクションという映画の異なった形態を、それぞれどう使ったらいいのかという問題についても、みなさんのご意見を聞かせていただけたらと思いました。

実は私は、このドキュメンタリーは宗教学ではなくて、メディア文化論という授業をやらせていただいたときに使いました。映像利用の問題は、宗教学なり政治学なり地域研究なりの枠を超えて、メディアリテラシーの問題と不可分であると思います。私たちが専門の教育の中でどう映像を使うかという問題は、私たち自身と生徒とのメディアリテラシーの問題、メディア文化論やメディア学の問題をどう扱うのかという問題と、非常に難しく関わってきます。講義の中で映画を使うには、それらの問題にそれなりの整理をつけていなくてはならないのではないかと感じ、非常に難しい課題と感じます。メディア論、メディアリテラシーの問題と、教育の中での映像利用というものをどう考えていच्छるかということも、皆さんのご意見をうかがえればありがたく思います。

最後に私が宗教学の講義で使ったことがある作品についてお話ししたいと思います。これもドキュメンタリーです。NHK青森製作の『津軽・故郷の光の中へ』という作品です。内容紹介を読み上げますと、「ハンセン病元患者で詩人の桜井哲夫さん（77）は、去年10月、60年ぶりに故郷、津軽へ帰ってきた。二度と踏むことはないと思きらめていた津軽の大地とわが家、故郷の人々との再会。帰郷の夢を果たした桜井さんの姿を見つめる」というものです。様々な偶然と必然と、関わった方々の真摯な思いが重なった上で、奇跡のように撮れた作品だと思います。この作品については、ドキュメンタリーの持つさまざまな意図に関する問題意識など放り出してしまうようで恐縮ですが、それでもやはり特別な作品であると思います。なぜこれを私が宗教学の時間に見せるかというのと、ここでもやはり、ファクトとフィクションの関わりを知る素材として見せています。桜井さんは詩人です。彼は60年間故郷から切り離され、病や孤独と戦いながら、詩を書いてきました。この人がついに故郷に帰ったとき、まず、60年前に別れたきり、もう永久に会うことのできないご両親の仏壇の前に座ります。ファクトだけで生きるなら人は死んだら塵になりますし、あるいはスピリチュアルに考えればどこで祈ってもいいという「千の風になって」のような考え方もあります。それでもやはりあの家のその場所に、かつて両親も座った仏壇の前に座るということ、そこで呼びかけるということが意味を持つ。これはやはり宗教的な、とっていいでしょう。私たちがファクト以上のリアルを生きている一つの例だと思

います。そして、桜井さんは、詩でいいです。60年前に故郷を離れる日に、両親の涙があった。そして今「故郷を離れて六十年 今は亡き両親の涙を 俺は指のない手で静かに拭いている」と。もう現実としての涙は拭けないけれども、彼は詩の中で涙を拭くわけです。私は何とか生徒たちに、宗教や物語というものが、どこかに切り分けられる偽りの虚の世界ではないということ、我々が世俗と宗教がきっちり分かれる世界に住んでいるというのは一つの思い込みに過ぎないかもしれないということを感じて欲しいのです。それをわざわざごちゃ混ぜにおしまいということではなく、もう一度生活空間というものを見直してほしいと、私としては願っております。近藤さんのご発表を聞きながら、私が考えていたこのような映像の使い方には、それなりの可能性と現実性があるのではないかと期待を、あらためていただきました。私のコメントは以上でございます。ありがとうございました。

井上 ありがとうございました。最初から比較的大きな問題、つまり「宗教と世俗」、「虚と実」、あるいはメディアリテラシーというようなキーワードが出てまいりました。この議論だけで一日が終わってしまうくらいのテーマです。こういう大きな枠組み、問いかけのもとに今日はやっていきますと、そういう意味合いがあるかと思います。これから次のセッションにまたいろんな具体的な話も出てきますので、そこにおそらく今投げかけられたテーマが見え隠れすると思います。最後の討議のときに、全部聞いた後で今聞いたことがどういった形で出てくるかということを議論していただくと面白いかと思います。